

長谷川哲子（関西学院大学経済学部／
関西学院大学院言語コミュニケーション文化研究科）

本稿では、2011年7月25日に開催された第9回間学日本語教育研究会における研究発表「学部留学生の日本語能力における問題点、およびその改善に向けた取り組み」について報告する。本発表は、これまでに筆者が従事した日本語教育機関において担当した授業で観察された問題点とその改善をめざした取り組みを報告するものである。

以下では、当日の配布資料に掲載した内容にもとづき、発表の概略を述べる。

○口頭表現における問題点と改善のための取り組み

実際の授業において留学生が感じている問題点として「プレゼンテーションが苦手」「話が分かりにくいと言われた」というような意見がある。先行研究においても、大学の専門教育担当教員に対する調査結果を通じて日本語力不足が問題点として指摘されている。そこで、ACTFL-OPIを準用したインタビュー形式による調査を行い、説明（記述、描写）のタスクの部分を観察した結果、口頭表現における問題点として、語彙の選択ミス、話題の抽象度によるブレイクダウン、話の続け方・終わらせ方の不適切さの3点を抽出した。こうした問題点を改善するための授業活動として、読解した文章の内容を図的にまとめ、その内容を自分のことばで再現して説明するというタスクを取り入れた。その結果、文章内の部分間の関連づけができていなかった、また、全体が理解できていないと内容を再構築できないという気付きが観察された。さらに、言い換えや例示のストラテジーの必要性が認識された。

○文章表現における問題点と改善のための取り組み

アカデミック場面における文章表現として意見文がある。大学教員を対象として日本語学習者の意見文に対する評価を調査したところ、評価の際の着目点について、文法的正確さのみでは高い評価を得にくく、文法などの形式的側面よりも構成などの内容的側面のほうが評価に影響することが明らかになった。こうした傾向をふまえて、日本語学習者コーパスをもとにした作文評価調査を行い、分かりにくさの要因の一つとして、意見文の構成において主張と論拠のマッチングが適切に行われていないことを挙げ、実際の作文指導では全体の構成や主張と論拠の対応を意識させるような取り組みが重要であることを示した。また、もう一つの要因として、日本語学習者がライティングに対して抱いているビリーフが関連している可能性を指摘した。

最後に、大学生活においては、以上のような言語技能面の向上だけでなく、大学生として身につけるべき知的態度の涵養そのものが重要であることにも言及した。